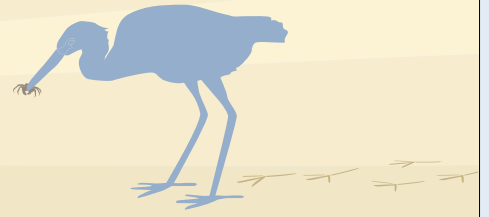


# なぎさ NEWS



## 「西なぎさ」をおとずれる鳥たち

気温が10℃を下回る日が続き、本格的な冬を迎えました。この時期は「西なぎさ」にやってくる人かげはまばらです。ただ、そんな時期だからこそ、干潟におとずれる鳥を間近で観察できます。

12月のある日、調査中に「ピーー」といった鳴き声が聞こえたので、ふりかえてみると、ハマシギの群れが細長いクチバシで砂の中をさぐり、大きさ1～2cmほどしかない貝をクチバシの先で器用にくわえて食べていました。また、岸から少し離れた沖に浮かぶ無数の黒いかたまりを双眼鏡で見ると、それはスズガモでした。首をおりまげて休んでいる様子や、エサである二枚貝を見つけたのか、水中に潜っていく様子が観察できました。これらの鳥は越冬のために東京湾に飛来しています。環境省生物多様性センターが発表した調査報告によると、平成28年度には「西なぎさ」と「東なぎさ」沖で、最大で10,000羽以上のスズガモが観察されています。二つの人工干潟は、このような鳥たちのエサ場、休息の場としても重要な環境なのです。（教育普及係 西村 大樹）



干潟でエサを探すハマシギ

## 干潟の“見えない”働きもの アラムシロガイ



貝の死がいが集まったアラムシロ

アラムシロガイは、干潟で見られる殻長1.5cmほどの巻貝です。ふだんは砂泥中にもぐって隠れているので、姿はほとんど見えません。水管と呼ばれるストローのような器官を、地面の下から水中にわずかに伸ばし、魚や貝の死がい等のエサのにおいを感知するとワラワラとはい出てきます。そして水管を左右に振りながら、においをたよりにエサに群がり、あっという間に食べ尽くしてしまいます。「西なぎさ」での地曳き網調査のときにも、ひき終わった網に入った生き物のおいさに誘われて、どこからともなく集まってきます。網を片付けようと持ち上げたところ、知らないうちに何十ものアラムシロガイが集まってきていてギョツとしたこともありました。

実はアラムシロガイは、弱った生き物や新鮮な死がいを食べることから、「干潟のお掃除屋」とも呼ばれています。水族園では特設展示「見えない海の生き物たち」で展示しているほか、10minライブ\*ではにおいをたよりに「ワラワラと出てきてエサに群がる」様子を実験で紹介しています。（調査係 君島 裕介）

\*10minライブの内容は、日によって異なります。ご了承ください。

## なぎさ 生き物ミニ情報

水族園は「西なぎさ」と「東なぎさ」で、さまざまな調査を行っています。今回は、12月に行った地曳き網調査と12月と1月に行った生き物調査の結果をお伝えします。

12月の調査ではアナジャコも見つかった

**12月地曳き網調査：**水温11.5℃、気温8.8℃。生き物の少ない、冬らしい「西なぎさ」。網の中には、環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されているチクゼンハゼが入っていました。西なぎさではあまり見られない貴重な魚です。

**12月生き物調査：**水温11.8℃、気温12.8℃。今回の調査ではニホンスナモグリのすり鉢状の巣穴を多数発見し、慎重に掘ってみると大きさ3cmほどの生体を確認することができました。

**1月生き物調査：**水温11.9℃、気温9.5℃。この時期、昼間の干潮時もあまり潮が引かず、地上で活動する生き物が少ないため鳥が目立ちます。「東なぎさ」には稀にやってくるクロツラヘラサギが「西なぎさ」にも飛来していました。